In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	孟郊連作詩訳注 ： 「石淙十首」
Author	齋藤, 茂
Citation	人文研究. 46 巻 9 号, p.475-510.
Issue Date	1994
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第四六巻　第九分冊　一九九四年十二月

孟郊連作詩訳注
――「石淙十首」――

齋藤　茂

（一）はじめに

孟郊（七五一～八一四）は韓愈と親しく、韓とともに言葉の彫琢を極め、難解な詩風を持つことで知られる詩人である。彼の詩には用語、感覚などにおいて様々な特徴が認められ、既に幾つかの論文によってその特徴の諸点が指摘されているが、特に詩作の方法として注目されることは、十首前後に達する本格的連作詩が十組残されており、連作詩に特別な関心を寄せていたことが伺える点であろう。しかも、この点は彼以前の詩人に類例を見ない。従って、連作詩の解明は、孟郊の詩の研究において、非常に重要な意味を持つと考えられる。筆者は既に彼の連作詩に度々論及してきたが、その一篇である「孟郊〈石淙十首〉について―聯句から連作詩へ―」（文藝論叢四二号）において、孟郊が連作という手法を選び取った背景に、韓愈と行った聯句の影響が有った可能性を指摘し、連作詩の

中で最も早い時期の制作と推定される「石淙十首」がその転換点に位置するのではないかと見る仮説を提出した。しかしその際、紙幅の都合から「石淙十首」の細部にわたる検討を行ない得ず、聯句や連作詩において多用される傾向にある詩語が認められることを指摘しながら、その用例を十分に掲げることができなかった。そこで本稿は、十首の作品の訳注を中心に構成し、前稿の欠を補うことにしたい。

（二）連作の訳注

前稿ではすべての作品を掲げることができず、また解釈、注を挙げる余裕も無かったので、ここに十首全体を掲げ、訳注を加える。華忱之校訂の『孟東野詩集』（人民文学出版社刊）を底本とし、影宋本（大安刊）を適宜参照する。訓読を施し、以下に大意、並びに孟郊、韓愈等の使用例の検討を中心とした語注を記すという構成を取る。唐以前の詩文の用例は、文選、玉台新詠以外は、基本的に先秦漢魏晋南北朝詩、全上古三代秦漢三国六朝文に従い、また孟郊以外の唐人の詩文については、便宜的に全唐詩、全唐文に拠る。用例に付けた略号は、文は文選、玉は玉台新詠、全は全唐詩、全文は全唐文、集は別集を意味する。また数字は巻数である。用例の検索に当たっては、佩文韻府、駢字類編の他、文選、玉台新詠の索引、及び謝霊運、謝朓、杜甫、李白、孟浩然、白居易、劉禹錫、柳宗元等の索引を利用した。これらによっても検索され得ない場合、「未見」という表現を用いたが、このように限られた範囲での検索に止まるもの故、あくまで一つの目安として記すものである。なお詩題に言う「石淙」については、既に前稿において、洛陽東南の嵩山山中の景勝地であることを指摘した。またそこで則天武后の「夏日に石淙に遊ぶ詩の序」（『全唐文』巻九七）を掲げ、則天武后と宮廷詩人達が、この嵩山山中の景勝地に遊んで幾多の詩を作っていることも紹介した。

〈第一首〉

巖谷不自勝　巖谷　自からは勝ならず
水木幽奇多　水木　幽奇多し
朔風入空曲　朔風　空曲に入り
涇流無大波　涇流　大波無し
迢遞逗難盡　迢遞として逗(あふ)れて尽き難く
參差勢相羅　參差として勢は相い羅なる
雪霜有時洗　雪霜　時に洗う有り
塵土無由和　塵土　由りて和する無し
潔冷誠未厭　潔冷　誠に未だ厭かず
晩歩将如何　晩歩　将た如何せん

（大意）

巖と谷と、それだけで景勝たりうるわけではない。水や木の様子に、深遠で優れたところが多いのだ。北の風が人気のないこの一隅に吹き入り、豊かに通う流れには大きな波が立たない。遥々と連なる水は溢れて尽き難く、不揃いに突き出た巖の有り様は連なり続いている。（この渓谷は）雪や霜が降って時に洗い清め、塵や土は混じりようがない。清潔で清々しく、誠にいつまでも見飽きない。遅くなってこの地を歩いていることを、さてどうしたら良いか。

（注釈）

＊巌谷：其の十にもう一度見える。前例は王維「韋侍郎山居」詩（全一二五）の「閑花満〇〇、瀑水映杉松」など。＊勝：景勝の意であろう。以下に見るように、この連作では勝地を尋ね歩くことが一つのテーマとなっている。＊水木：「立徳新居十首」其の十（巻五）にも「東南富〇〇、寂寥蔽光輝」と見える。前例は謝混「遊西池」詩（文二二）の「景昃鳴禽集、〇〇堪清華」など。＊幽奇：前例は蕭穎之「白鷴賦序」（全文三二一）の「白鷴羽族之〇〇也」など。また山水の景勝について言う例は、白居易「湖亭晩望殘水」詩（全四三〇）の「久爲山水客、見盡〇〇物」などがある。＊朔風：習見の語。曹植「朔風」詩を始め『文選』には頻見する。＊空曲：「同年春讌」詩（巻五）に「幽蘅發〇〇、芳杜綿所思」と見える。前例は杜甫「重経昭陵」詩（全二二五）の「陵寢盤〇〇、熊羆守翠微」など。＊涇流：他の例では、「〇〇合渭流、清濁各自持」（巻二、罪松）「渭水不可渾、〇〇徒相侵」（巻七、答晝上人止讒作）のように、涇水を意味するが、ここは『荘子』秋水篇の「秋水時至、百川灌河、〇〇之大、兩涘渚崖之間、不辯牛馬」（注に「涇、通也」とある。）を受けて、豊かな水の流れを言うのであろう。なお、一本では「徑流」に作る。それならば、「真っ直ぐな流れ」か。＊大波：習見の語。孟には他に「求友」詩（巻三）の「下有〇〇瀾、對之無由見」の例がある。＊迢遞：前例は嵇康「琴賦」（文一八）の「指蒼梧之〇〇、臨廻江之威美」など。＊逗：留める意ではなく、漏れ溢れる意。「遊韋七洞庭別業」（巻四）に「逍遥展幽韻、參差〇良觀」また「城南聯句」（全七九一。韓孟の聯句はすべてこの巻にあるので、以下聯句については巻数の注記を省略する）に「〇翳翅相築、擺幽尾交搒」との例がある。＊參差：習見の語であり、孟には他に八例ある。＊雪霜：其の九にも見え、また「霜雪」は其の六に見える。いずれも習見の語であり、孟には他に「和宣州錢判官使院廳前石楠樹」詩（巻九）に「生長如自惜、〇〇無凋渝」との例がある。なお『礼記』「月令（孟冬）」などでは「雪霜不時」と使われるが、ここはそれを意識して「有時洗」と続けたか。また「寒溪九首」其の一（巻五）には「霜洗水色盡、寒溪見纖鱗」

という例もある。＊塵土：習見の語。孟には他に三例ある。＊潔冷：用例未見。「皎潔」「冷冷」などは珍しくないが、その両方を加味した意味か。なお一本には「結吟」に作ると注するが、これも用例未見。意味からは「潔冷」の方が勝るだろう。＊晩歩：前例は未見。劉禹錫に「〇〇揚子遊南塘望沙尾」詩（全三五五）があり、また杜牧の「秋晩與沈十七舍人期遊樊川不至」詩（全五二一）には「杜邨連漘水、〇〇見垂鈎」とある。なお宋詩には用例が多い。夕方に歩む意味が一般であろうが、ここは晩年の意味も重なっているか。

〈第二首〉

出曲水未斷　曲を出でて水は未だ断えず
入山深更重　山に入りて深くして更に重なる
冷冷若仙語　冷冷として仙語の若し
皎皎多異容　皎皎として異容多し
萬響不相雜　万響　相い雑らわず
四時皆自濃　四時　皆　自から濃し
日月互分照　日月　互いに分け照らし
雲霞各生峯　雲霞　各おの峯に生ず
久迷向方理　久しく向方の理に迷いしが
逮茲聳前蹤　茲に逮んで前蹤を聳やかす

（大意）

川の曲折した所を出て先へ行っても、水は絶えることなく、山の中に入れば、深くなるほど一層山は重なってくる。清らかな水音は仙人の言葉のようで、明らかな世界には（俗世にはない）珍しい姿のものが多い。様々な音が互いに混じることなく、四季いずれの時期にもこまやかな良さを見せる。日月が互いに分かれて照らし、雲や赤い雲気はそれぞれに峰に生じる。長いこと正しい道に至る道理に迷っていたが、ここに及んで嘗て歩んだ道を高しとする。

（注釈）

＊出曲：其の一に「空曲」とあったように、「曲」は渓水の屈折した所か。下の「入山」と対応することから、川筋から離れる意と解しておく。「入山」は習見の語だが、こちらは用例未見。＊泠泠：清らかな水音の形容。前例は陸機「招隠詩」（文二二）の「山溜何○○、飛泉漱鳴玉」など。孟には用例が多く、清らかな音、清らかな涼しさの形容などの意を含めて、他に五例ある。そのうち「遊石龍渦」詩（巻五）では「山下晴皎皎、山中陰○○」と、ここと同様「皎皎」と対応する。＊仙語：劉禹錫の「歩虚詞二首」其の二（全三六五）に「星星○○人聽盡、却向五雲翻翅飛」との例がある。＊皎皎：白く明らかな形容。『詩経』小雅「白駒」に「○○白駒、食我場苗」とあり、釈文に「皎、絜白也」と注する。＊異容：前例は張九齢「晩憩王少府東閣」詩（全四九）の「窈窕生幽意、參差多○○」など。＊萬響：ありふれた語のようだが前例未見。孟は「寒江吟」（巻二）にも「一言縦醜詞、○○無善應」と用いる。＊四時：習見の語。孟には他に九例ある。＊日月：これも習見の語だが、其の九、「寒溪」其の五（巻五）、「峡哀十首」其の三、其の七、「弔元魯山十首」其の四（以上巻一〇）、及び「城南聯句」など、孟には連作、聯句での用例が目立つ。＊分照：前例は李白の「流夜郎題葵葉」詩（全一八三）の「白日如○○、還歸守故園」など。＊雲霞：謝霊運の「石壁精舎還湖中作」詩（文二二）の「林壑斂暝色、○○收夕霏」など、習見の語。＊生峯：

孟は「題韋少保靜恭宅藏書洞」詩（巻五）にも「仙華凝四時、玉蘚〇數〇」と用いる。＊向方：前例は干宝の「晋紀総論」（文四九）の「求明察以官之、篤慈愛以固之、故衆知〇〇」など。（李周翰注「向正道矣、方、道也。」李善注には、『礼記』「楽記」の「楽行而民郷方」を「向方」の先例として引く。「楽記」の注にも「方、猶道也」とある。）なおここは、「方理」と熟することも可能に見えるが、「方理」の用例は未見。＊前蹤：前例は裴松之「上三国志注表」の「將以總括〇〇、貽誨來世」や、謝恵連「七月七日詠牛女」詩（玉三）の「弄杼不成彩、聳轡驚〇〇」など。ただし「聳蹤」という例は未見。「聳」はこの場合高くする意であろうが、其の五の注釈でふれるように、これは孟の愛用の語。

〈第三首〉

荒策每恣遠　荒策　毎に遠きを恣にし
戇步難自廻　戇步　自ら廻り難し
已抱苔蘚疾　已に苔蘚の疾（やまい）を抱くに
尚凌潺湲隈　尚お潺湲の隈（くま）を凌ぐ
驛驥苦銜勒　驛驥　銜勒に苦しみ
籠禽恨摧頹　籠禽　摧頹せらるを恨む
實力苟未足　実力　苟も未だ足らざれば
浮誇信悠哉　浮誇　信に悠なる哉
顧惟非時用　顧みて時用に非ざるを惟い

静言還自咍　　静かに言い　還た自ら咍(わら)う

（大意）

粗末な杖をついて、いつも遠くまで恣に山歩きをし、道に従わぬ愚かな足どりは、自ら引き返すことが難しい。苔がつるつるとして、それに足を取られそうになることに苦しんでいるのに、なおもさらさらと流れる川の隈を越えて行く。駅つぎの馬は、はみやおもがいで拘束されるのに苦しみ、籠の鳥は、飛べないように羽を切られたことを恨む。（なまじ役に立てば拘束に悩まされなければならない。それに）仮にも実際に役立つ力が足りなければ、浮ついた大言壮語などは、全くのところ自分とかけ離れたものではないか。振り返って我が身の時の用に立つ材ではないことを思い、静かに物言い、そして自ら笑うのだ。

（注釈）

＊荒策：用例未見。あるいは孟の造語か。其の十には「荒尋」の例も有る。「荒」には粗末なという意味だけでなく、人の手の入らない場所（を歩く）という意味も含まれるか。なお孟には「野策」（巻一、長安羈旅行）「瑶策」（巻五、與王二十一員外涯遊昭成寺）「雲策」（巻五、題從叔述靈巖山壁）などの語も見える。＊恣：孟の愛用の語の一つ。其の七、十にも見えるほか、「城南聯句」に三度用いるなど、用例は多い。＊戇歩：これも孟の造語か。「寒溪」其の二（巻五）に「癡坐直視聽、戇行失蹤蹊」とあるのが類例。「戇」字の例の多いことも、孟の特徴と言えるが、其の七の「戇獣」や「戇叟」（巻四、靖安寄居など）「癲戇」（巻五、濟源春）「戇人」（巻七、寄陝府給事）のように、他の例は意味が捉えやすいのに比べ、この「戇歩」と「戇行」は動作について言うために、やや曖昧さが残る。一応、道に依らず意の赴くままに歩くことと解しておく。＊苔蘚疾：これも造語か。滑りやすく歩行に苦しむので「疾」と言ったものだろう。なお「抱疾」という前例は、『晋書』九四「隠逸・戴逵伝」の「年垂耳順、

常○羸○」や孟浩然「送王昌齢之嶺南」詩（全一六〇）の「已○沈痾○、更貽魑魅憂」など。＊潺湲隈：「潺湲」は習見の語であり、孟の用例も其の八など他に五例ある。但しこのように「隈」が付いた形の用例は未見。また「凌隈」という熟語も未見。なお「隈」は、『説文』（一四下）には「水曲也」とあり、川筋が屈曲して深くなった所。＊驛驥：用例未見。「驛馬」であれば普通だが、あえて「驥」と言うことで、新味を出したものか。＊銜勒：前例は虞世南「擬飲馬長城窟」詩（全三六）の「輕騎猶○○、疑兵尚解鞍」など。＊籠禽：前例は韋應物「送劉評事」詩（全一八九）の「○○羨歸翼、遠守懷交親」など。これも「籠鳥」の方がより普通。＊摧頹：前例は應瑒「侍五官中郎將建章臺集」詩（文二〇）の「遠行蒙霜雪、毛羽日○○」など。＊實力：前例は『宋書』二「武帝紀中」の「加大尉司馬、丹陽尹劉穆之建威將軍、配以○○」があるが、これは武力を背景とした実権を言ったもの。ここは、そういう政治的な用語であることを意識しつつ、やや諧謔的に言ったものか。＊浮誇：前例は『晉書』六二「劉琨伝」の「琨少負志氣、有縱横之才、善交勝己、而頗○○」があり、また韓愈の「進学解」（全文五五八）にも「春秋謹嚴、左氏○○、易奇而法、詩正而葩」とある。いずれも大げさに言葉を飾る意味。＊悠哉：『詩経』以来頻用される語だが、ここは遠くかけ離れた取り留めのない気分を表すか。＊顧惟：前例は顔延之「皇太子釋奠會作詩」（文選巻二十）の「永瞻先覺、○○後昆」など。孟は「贈蘇州韋郎中使君」詩（巻六）でも「○○菲薄質、亦願將此并」と用いる。＊時用：前例は嵇康「與山巨源絶交書」（文四三）の「不過欲爲官得人、以益○○」や、潘岳「在懐県作詩二首」其の一（文二六）の「虚薄乏○○、位微名目卑」など。＊靜言：周知のように『詩経』には「○○思之、寤辟有摽」（邶風、柏舟）など、「言」を助字として読む例があるが、ここは恐らく実字として読むべきだろう。陸機「猛虎行」（文二八）の「○○幽谷底、長嘯高山岑」などの前例が有る。孟には「送蕭鍊師入四明山」詩（巻七）の「○○不語俗、靈蹤時步天」の例もある。＊自哈：白居易「攜諸山客同上香爐峯、遇雨而還、・・

」詩（全四三九）に「襪汙君相謔、鞋穿我〇〇」とある。また「咍」は、『楚辞』「九章・惜誦」に「行不羣以巔越兮、又衆兆之所〇也」とあり、王逸注は「〇、笑也。楚人謂相嘲笑曰〇」と説明する。

〈第四首〉

朔水刀剣利　　朔水は刀剣のごとく利く
秋石瓊瑶鮮　　秋石は瓊瑶のごとく鮮かなり
魚龍氣不腥　　魚龍　気は腥ならず
潭洞状更妍　　潭洞　状は更に妍なり
磴雪入呀谷　　雪を磴（ふ）んで呀谷に入り
掬星灑遥天　　星を掬いて遥天に灑ぐ
聲忙不及韻　　声忙（せわ）しくして韻するに及ばず
勢疾多斷漣　　勢い疾くして多く漣を断つ
輸去雖有恨　　輸し去るに恨み有りと雖も
躁氣一何顛　　躁気は一に何ぞ顛える
蜿蜒相纏掣　　蜿蜒として相い纏掣し
犖确亦廻旋　　犖确として亦た廻旋す
黑草濯鐵髪　　黑草は鉄髪を濯い
白苔浮冰錢　　白苔は氷銭を浮かぶ

具生此云遥　生を具すること　此に遥かなりと云うも
非徳不可甄　徳に非ざれば　甄るべからず
何況被犀士　何ぞ況や　犀を被る士の
制之空以權　之を制するに空しく権を以てするをや
始知静剛猛　始めて知る　剛猛を静むるは
文教從來先　文教　従来より先んずると

（大意）

北の川の水は（冷たくて）まるで刀剣のように鋭く皮膚を刺し、秋の石は美しい玉のように鮮やかに輝く。この川に住む魚や龍の吐く気には生臭さが無く、淵や洞窟の有り様は他のものに増して美しい。雪を踏み越えて大きな谷へと入り、星を掬い取って遥かな空に注ぎかける。水音は慌ただしくてハーモニーを奏でるには至らず、水勢は速くてしばしば波を断ち切って流れて行く。すべてが運び去られてしまうことが恨めしくはあっても、騒がしい俗気は何とひとえに覆されて（無くなって）いることか。うねうねと連なって流れは互いに牽き合い、ゴロゴロとした石に当たってはまた旋回する。（岸辺の）黒い草は鉄の髪を水に洗うかのようで、白い苔は氷の銭を水面に浮かべるかのようだ。自分の生き方を全うすることは今ここにおいては遥かなことで、徳が無ければ成すことはできない。ましてや犀利さを身につけた士人が、空しく権力で制しようとすることなどなおさらだ。始めて解る、剛猛さを静めるのには、礼楽を以て教化することが以前より第一に為すべきことであると。

（注釈）

＊朔水：北方の川の意味だろうが、他の用例は未見。孟もここのみ。川の名としては各地にあるようだが、ここに

は当たらない。＊刀劍：手を切るような水の冷たさを喩える。「刀劍」は孟郊が愛用するイメージの一つで、特に自然物にそれを感じ取るところに独特な感覚が有る。「秋懐十五首」其の六（巻四）の「老骨懼秋月、秋月刀劍稜」や「寒溪」其の三（巻五）の「波瀾凍爲刀、剸割鳧與鷖」などは、その代表的な例。＊秋石：劉得仁の「題呉先生山居」詩（全五四四）に「潭底見○○、樹間飛霽雲」との例がある。＊瓊瑶：『詩経』「衛風・木瓜」の「投我以木桃、報之以○○」など、習見の語。＊魚龍：魚龍の吐く気は、宋之問「夜渡呉松江懐古」詩（全五三）の「櫂發○○氣、舟衝鴻雁群」など、水行の詩に頻見する。またその気が生臭いことも、白居易「送客南遷」詩（全四四二）の「蚊蚋經冬活、○○欲雨腥」や温庭筠「秋雨」詩（全五八三）の「雲滿鳥行滅、地涼龍氣腥」など、しばしば歌われる。この「腥」も孟の愛用の語であり、「峽哀」（巻一〇）では龍のイメージと絡めて「○雨」「○草」「○語」「蘊○」などと用いる他、「寒溪」其の六には「刀頭仁義○、君子不可求」の例も有る。＊潭洞：仙境のイメージが ある。前例に鮑照「自礪山東望震澤」詩（宋詩八）の「爛漫○○波、合沓嶨嶂雲」があり、また劉禹錫「答東陽于令涵碧圖」詩（全三六一）に「新開○○疑仙境、遠寫丹青到雍州」との例がある。＊状更妍：「妍」は孟には六例有るが、女性や花以外のものを形容するのはここと「送魏端公入朝」詩（巻八）の「東洛尚淹翫、西京足芳○」の例。また「妍状」は『後漢書』巻十下「光武郭皇后伝論」に「及至移意愛、析嬿私、雖恵心○○、愈獻醜焉」とある。＊磴雪：用例未見。「磴」は韓愈「答張徹」詩（全三三七）の「○蘚撻拳跼、梯飆颭伶俜」のように、通常は石坂もしくは石橋の意だが、ここは踏む意だろう。＊呀谷：これも用例未見。「呀」は大きく口を開けた形容で、孟は「峽哀」（其の一、六）や「城南聯句」「征蜀聯句」でも用いている。聯句と連作詩にのみ見える語の一つである。＊掬星：用例未見。「掬」は手ですくい取る意で、やや注目すべき例には、「寒溪」其の一の「浄漱一○碧、遠消千慮塵」がある。＊遥天：前例は張正見「從籍田應衡陽王教作詩、五章、其の三」（陳詩三）の「雨師清遠路、

風伯靜○○」など。孟には「遊終南龍池寺」詩（巻四）に「晩磬送歸客、數聲落○○」の例がある。また「灑天」の前例は、張協「七命」（文三五）其の一の「衝飆發而廻日、飛礫起而○○」など。＊聲忙不及韻：「聲」と「忙」はあまり結びつかないのか、用例未見。また「及韻」の例も未見。自然の音が調べを成す時は、謝莊「月賦」（文一三）の「風篁成韻」のように「成韻」の語が一般的。＊勢疾多斷漣：「勢疾」「疾勢」のいずれも、用例未見。「斷漣」も同様。煬帝の「望海詩」（隋詩三）に「斷濤還共合、連浪或時分」とあるのが参考となるか。＊輸去：水がすべてを運び去るという意味か。用例未見。「輸」については、「城南聯句」に「瀟碧遠○委」という例がある。＊躁氣：前例未見。＊顛：倒れる、躓く、落ちるなどが一般的な意味。ここは覆ると読み、「躁氣」がすっかり無くなっている意味に解したが、自信は無い。＊蜿蜒：うねうねと連なる様で、前例は『楚辞』「離騒」の「駕八龍之○○兮、載雲旗之委蛇」など。＊纏掣：纏い牽く意だろうが、用例未見。「掣」は、孟は「峽哀」其の三「上仄碎日月、下○狂猗漣」でも用いる。なお「纏牽」という熟語は、左思「招隠詩二首、其の二」（文二二）に「結綬生○○、彈冠去埃塵」と見える。＊犖确：山の石がごろごろした様で、韓愈の「山石」詩（全三三八）に「山石○○行徑微、黄昏到寺蝙蝠飛」とある。なお、「犖」は「会合聯句」「納涼聯句（韓愈の句）」でも使われ、また「确」は「秋懐」其の十でも使われる。＊廻旋：「峽哀」其の一に「谷號相噴激、石怒爭旋廻」とあるのは、ここに類する。＊黒草：下の「白苔」同様、用例未見。草の様子を髪に喩えることは、孟は比較的好んだものか、「秋懐」其の七の「秋草瘦如髪、貞芳綴疎金」や「城南聯句」の「緑髪抽珉甃」の例がある。＊鐵髪：用例未見。しかし「黒草」の形容に「鐵」は相応しい。かつ「鐵」は孟の愛用の語の一つであり、特に「秋懐」には其の十の「幽竹嘯鬼神、楚○生虬龍」、其の十二の「老蟲乾○鳴、驚獸孤玉咆」など、自然物に「鐵」を感じ取った表現が多い。なお「濯髪」の例は、『楚辞』「離騒」の「夕歸次於窮石兮、朝○○乎洧盤」など。＊冰錢：用例未見。なお「苔錢」の

例は、劉孝威「怨詩」（梁詩一八）の「丹庭斜草徑、素壁點〇〇」など。また「浮冰」は「秋懐」其の六に「鰥雌巣空鏡、仙飆蕩〇〇」と用いる。「浮錢」は用例未見。＊具生：「具」は一本は「其」に作るが、「具」を取る。但し「具生」の例は未見。＊非徳：言葉としては『尚書』「盤庚上」の「予亦不敢動用〇〇」が古い例だが、これは施すべきでない所に施す恩徳の意。ここは徳に当たらない、あるいは徳を持たない状態を言うだろう。また「甄」は、もと陶器を作り上げる意で、左思の「魏都賦」（文六）の「玄化所〇、國風所稟」などがある。＊被犀士：よく解らない。「被犀」「犀士」も用例未見。「犀角」で貴相を意味することがある（『戦国策』三三「中山策」：「〇〇偃月、彼乃帝王之后」）のを考慮すれば、あるいは「被犀士」で貴顕の地位にある人を言うか。＊剛猛：『漢書』七七「何並伝」の「我以柔弱徴、必選〇〇代」など、習見の語。但し、詩には余り用いられない言葉だろう。この一句もよく解らない。なお、「靜剛」「靜猛」という熟語も用例未見。＊文教：前例は『尚書』「禹貢」の「五百里綏服、三百里揆〇〇、二百里奮武衛」や謝朓「三日侍華光殿曲水宴代人應詔」詩、其の六（斉詩三）の「〇〇已肅、武節既馳」など。また韓愈の「河南府同官記」（全文五五七）にも「武志既揚、〇〇亦熙」と用いる。

〈第五首〉

空谷聳視聽　空谷　視聽を聳やかし
幽湍澤心靈　幽湍　心霊を沢おす
疾流脱鱗甲　疾流　鱗甲を脱し
疊岸衝風霆　疊岸　風霆を衝く
丹巘墮瓌景　丹巘　瓌景を墮とし

霽波灼虚形　霽波　虚形を灼かす
淙淙亟厚軸　淙淙として厚軸を亟ち
稜稜攅高冥　稜稜として高冥を攅つ
弱棧跨旋碧　弱棧　旋碧を跨ぎ
危梯倚凝青　危梯　凝青に倚る
飄颻鶴骨仙　飄颻たり　鶴骨の仙
飛動鼇背庭　飛動す　鼇背の庭
常聞誇大言　常に聞く　誇大の言
下顧皆細萍　下顧すれば皆な細萍たり

（大意）

がらんとした谷は視力聴力を一層高め、静かな早瀬は魂を潤す。速い流れは鱗や甲羅をつけたものの姿を取り去り、重なり聳えた岸は風や雷に突き当たって遮る。赤い肌を見せる山は、雄大で美しいその姿を水面に落とし、きらりと光る波は、実体のない物の姿を一瞬輝かす。水はザワザワと流れて大きな車軸を打ち、山はそそり立って高い空を穿つ。弱々しく頼りない架け橋は渦巻く碧緑の流れを跨ぎ、危なっかしい梯子は青々とした空に寄り掛かる。ひらひらと舞う、鶴のようなほっそりとした仙人。飛動する、鼇の背に乗った三仙山の庭。（それらは）常々誇大な話と聞いていたが、（今ここに来て）下を見れば、人間世界はすべてちっぽけな浮き草のよう。

（注釈）

＊空谷：『詩経』小雅「白駒」の「皎皎白駒、在彼○○」（伝：空、大也）以来、賢者の隠棲する山谷というイメー

ジがある。＊視聽：習見の語であり、前例は王羲之「三月三日蘭亭詩序」（全晋文二六）の「仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以遊目騁懐、足以極○○之娯、信可樂也」など。なお第八首にもう一度使われる。また「聳」は第二首でも触れたように、孟郊愛用の語。「石淙」の中で四回使われている他、「秋懐」其の十三（巻四）「弔元魯山」其の八（巻一〇）にも見える。なお「戲贈無本二首、其の二」（巻六）には「燕僧聳聽詞、袈裟喜翻新」の例がある。また「聳視」の例は、『旧唐書』一七七「崔琯伝」に「莊色于朝、羣公○○、讜詞不撓、淑問攸歸」と見える。＊幽湍：奥深い所を流れる早瀬の意だろうが、前例未見。「幽澗」ならば普通。「湍」は第十首にも見える他、「贈黔府王中丞楚」詩（巻六）には「嘉實綴緑蔓、涼○瀉清聲」の例がある。＊心靈：前例は『隋書』三二「経籍志」一の「詩者、所以導達○○、歌詠情志者也」など。＊疾流：前例は王昌齢「小敷谷龍潭祠作」詩（全一四一）の「崖谷歊○○、地中有雷集」など。＊鱗甲：習見の語。前例は左思「呉都賦」（文五）の「瓌異之所壽育、○○之所集往」など。また「脱」は除く意か。孟はこの字も連作詩や聯句によく用いる。なお陳延傑注では、この句を「言石淙疾流、波浪飛動、若魚龍之脱鱗甲也」と解するが、そうではあるまい。＊疊岸：岸が段丘のように重なっているのか。用例未見。なお李白「姑熟十詠・姑熟溪」詩（全一八一）には「波翻曉霞影、岸疊春山色」との例がある。＊風霆：『礼記』五一「孔子閑居」に「地載神氣、神氣○○」とあり、韓愈「原鬼」（全文五五八）にも「有聲而無形者、物有之矣、○○是也」と見える。また「衝風」は『楚辞』九歌「少司命」に「○○至兮水揚波」とあり、韓愈「盧郎中雲夫寄示盤谷子詩兩章歌以和之」詩（全三四〇）にも「○○吹破落天外、飛雨白日灑洛陽」とある。＊丹巘：前例は沈約「鍾山詩應西陽王教」詩（文二二）の「鬱律構○○、崚嶒起青嶂」など。＊瓌景：用例未見。「瓌」は大、もしくは珍奇な意。先の左思「呉都賦」の「○異」や宋玉「神女賦序」（文一九）の「○姿瑋態、不可勝賛」など、「瓌」の例は珍しくない。なお孟は第八首にも使う他、「城南聯句」に二度用いる。＊霽波：晴れた空

のように明るく光る波の意か。用例見えず、あるいは孟の造語かもしれない。＊虚形：言葉としては儲光羲「同諸公登慈恩寺塔」詩（全一三八）の「○○賓太極、攜手行翠微」などが前例となるが、より基本的には木華「海賦」（文一二）の「芒芒積流、含形内虚」（李善注：言水能含衆形内虚）を踏まえるだろう。＊淙淙：水流の様だが、同時に流れの音も形容するだろう。前例は陶淵明「祭従弟敬遠文」（集七）の「○○懸溜、曖曖荒林」や、高適「賦得還山吟送沈四山人」詩（全二一三）の「石泉○○若風雨、桂花松子常滿地」など。＊厚軸：大きな車軸を押し流すというのは、水流の激しさの形容としてよく用いられる。後の例だが、薛逢「大水」詩（全五四八）の「勢恐圓樞折、聲疑○○摧」など。また「匾」は木華「海賦」（文一二）に「磊匐匐而相○」（李善注：相擊也）とあり、孟は「征蜀聯句」でも「渴鬪信○呶」と使う。＊稜稜：ここは角張った形容。前例は、書体について言う梁武帝「答陶弘景書」（全梁文六）の「○○凛凛、常有生氣」など。また嶺を言う例に、白居易「和分水嶺詩」（全四三五）の「高嶺峻○○、細泉流亹亹」などがある。なお「生生亭」詩（巻五）には「島島立平地、○○浮高冥」と、ここに類似した表現が見られる。＊高冥：前例は陸機「齊謳行」（文二八）の「洪川控河濟、崇山入○○」など。「冥」は『楚辞』九章「悲回風」の「據青○而攄虹兮」のように、空を言う。また「攢」は錐で刺すように鋭く突き立つ様で、韓愈の「答張徹」詩（全三三七）の「泉紳拖脩白、石劍○高青」や、「雪後寄崔二十六丞公」詩（全三四二）の「○天嵬嵬凍相映、君乃寄命於其間」などはその類例。＊弱棧：用例未見。「弱」は頼りなく危なっかしい意か。「秋雨聯句」に「弱途擁行軑」、また「同宿聯句」には「朝行多危棧」の例がある。＊旋碧：渦を巻く流れを言うのだろうが、用例未見。「峽哀」其の一（巻一〇）の「峽水聲不平、碧沱牽清洄」が類例。また韓愈「送僧澄觀」詩（全三四二）の「影沈潭底龍驚遁、當晝無雲跨虚碧」は塔の形容で、「虚碧」は大空の意だが、表現はここに類する。＊危梯：用例未見。「終南山下作」詩（巻九）の「家家梯碧峯、門門鏁青煙」や、韓愈の「送惠師」詩（全三三七）

の「發跡入四明、梯空上秋旻」は類する発想。＊凝青：劉禹錫「楚望賦」（全文五九九）に「栝樹童立、積空○○」とある。また「倚青」は、山のみどりに倚る意だが、「長安旅情」詩（巻三）に「玉京十二樓、峨峨○○翠」とある。＊飄飄：前例は曹植「洛神賦」（文一九）の「○○兮若流風之廻雪」など。習見の語であり、孟も多用する。＊鶴骨：齊己の「戊辰歳湘中寄鄭谷郎中」詩（全八三八）に「瘦應成○○、閑想似禅心」との例がある。＊飛動：宗楚客「奉和安樂公主山莊應制」詩（全四〇）の「水邊重閣含○○、雲裏孤峯類削成」など、用例は多い。「城南聯句」の「危望跨○○」はここに類する。＊鼇背：左思「呉都賦」（文五）に「巨鼇贔屭、首冠靈山」とあり、劉淵林注に『列仙伝』を引いて「鼇負蓬莱山而抃滄海之中」と言う。「鼇背」の例は庾信の「謝趙王賚馬并繖啓」（集八）の「在命之輕、鴻毛浮於弱水、知恩之重、○○負於靈山」などがある。＊誇大：前例は『春秋公羊伝』七「荘公九年」八月の条の「曷爲伐敗」に対する何休の注の「曷爲自○○其伐而取敗」や張華『博物志』五の「司馬遷云、無堯以天下讓許由事。揚雄亦云、○○者爲之」など。また同じ意の「夸大」は、孫楚「爲石仲容與孫皓書」（文四三）の「苟以○○爲名、更喪忠告之實」などの例がある。＊下顧：言葉の用例は欧陽建「臨終詩」（文二三）の「○○所憐女、惻惻中心酸」（李善注：顧、念也）が早いが、ここと同じ意味の例は賈島「易州登龍興寺樓望郡北高峯」詩（全五七一）の「何時一登陟、萬物皆○○」など。＊細萍：前例は梁簡文帝「採桑」詩（玉七）の「○○重疊長、新花歴亂開」など。高遠所から見た地、物の小ささを水に浮かぶ萍に喩える例は、孟には他に「奉同朝賢送新羅使」詩（巻八）の「淼淼望遠國、一○秋海中」などがある。

〈第六首〉

百尺明劍流　百尺　明劍流れ
千曲寒星飛　千曲　寒星飛ぶ

爲君洗故物　君が為めに故物を洗えば
有色如新衣　色有ること新衣の如し
不飲泥土汚　泥土の汚れを飲まず
但飲霜雪飢　但だ霜雪の飢を飲む
石稜玉纖纖　石稜は玉のごとく纖纖たり
草色瓊霏霏　草色は瓊(たま)のごとく霏霏たり
谷磑有餘力　谷磑　余力有り
溪舂亦多機　溪舂　亦た機多し
從來一智萌　從来　一智の萌えれば
能使衆利歸　能く衆利をして帰せしむ
因之山水中　之に因りて山水の中に
喧然論是非　喧然として是非を論ず

（大意）

百尺の明るく輝く剣（のような水）が流れ行き、数多くの水曲には冬の星（のような冷たい光）が飛ぶ。君のために古くからの物を洗えば、鮮やかな色が出て新しい衣のようになった。泥土に汚れた水を飲まず、ただひたすら霜と雪とを飲んで飢えている。尖った石の角は玉のようにほっそりと美しく、草の色は瓊のように青く濃い。谷という石臼には余力があり、谷川の水は（水車の）臼をついて働きが多い。従来一つの智恵が兆せば、諸々の利をそこへ帰属させることができた。それ故にこの山水の中に、騒がしく是非の論が起こる。

（注釈）

＊百尺：水の流れを形容する前例は、李白「題宛溪館」詩（全一八四）の「吾憐宛溪好、〇〇照心明」など。＊明剣流：川の流れや月光などの自然物に「刀剣」を感じ取るのが、孟の感覚の特徴であることは第四首の注に述べた。但し「明剣」も「剣流」も用例は未見。＊千曲：川や岸の湾曲を言う例としては、張説「同趙侍御乾湖作」詩（全八六）の「一灣一浦悵遶廻、〇〇千澁恍迷哉」などがある。＊寒星：前例は李冶「寄校書七兄」詩（全八〇五）の「遠水浮仙棹、〇〇伴使車」などがあるが、ここは流れの輝きを比喩するのだろう。また「星飛」の前例は駱賓王「晩泊河曲」詩（全七九）の「水淨千年近、〇〇五老遥」など。＊故物：通常は古くから有る物を言う。「古詩十九首」其の十一（文二九）の「所遇無〇〇、焉得不速老」など。＊有色：洗うと鮮やかな色が保たれているということか。ここと同様の用例は未見。＊新衣：前例は嵇康「琴賦」（文一八）の「〇〇翠粲」など。＊不飲：「汴州別韓愈」詩（巻八）に「〇〇濁水瀾、空滯此汴河」との類例がある。＊泥土：前例は王褒「責鬚髯奴辭」（全漢文四二）の「汗垢流離、汚穢〇〇」など。韓愈の「晝月」詩（全三四五）にも「玉盤不磨著〇〇、青天孔出白石補」とある。また「泥汚」は、「贈黔府王中丞楚」詩（巻六）に「路遐莫及盼、〇〇日已盈」の例がある。＊但飲：「贈文應上人」詩（巻六）に「不踐有命草、〇〇無聲泉」の例がある。＊霜雪飢：第一首に「雪霜」の語が見える。また孟には「飢雪吟」（巻三）がある。＊石稜：前例は杜甫「西閣雨望」詩（全二二九）の「逕添沙面出、湍減〇〇生」など。＊纖纖：前例は鮑照「翫月城西門解中」詩（文三〇）の「始見西南樓、〇〇如玉鉤」など。＊草色：前例は沈約「初春」詩（玉五）の「〇〇猶自菲、林中都未有」など。＊霏霏：草の青々とした様子を言う前例は、杜甫「宣政殿退朝晩出左掖」詩（全二二五）の「宮草〇〇承委珮、鑪煙細細駐遊絲」（「〇〇」はテキストによっては「微微」に作る）など。＊谷磑：用例未見。孟の造語か。「磑」は石臼。なお「寒溪」其の五（巻五）の「凍飆雜碎

號、壅音坑谷辛」でも、表現は異なるが、同様に谷に物を微塵に砕く力を読みとっている。＊餘力：『論語』学而篇の「行有○○則以學文」や、賈誼「過秦論」（文五一）の「秦有○○、而制其弊」などが知られる。詩の例は杜甫「送高三十五書記」詩（全二一六）の「邊城有○○、早寄從軍詩」など。＊溪春：これも用例未見。なお「城南聯句」の「機春潺湲力」はここに類似する。また李白「送内尋廬山女道士李騰空二首」其の一（全一八四）に「水春雲母碓、風掃石楠花」、韓愈「劉生」詩（全三三九）には「遂凌大江極東陬、洪涛春天禹穴幽」との例がある。＊多機：『列子』仲尼篇の「大夫不聞齊魯之○○乎、有善治土木者、有善治金革者、…」（張注：多巧能之人）などの例があるが、詩には余り見られない。＊一智：前例は陸機「園葵」詩（晋詩五）の「庇足同○○、生理各萬端」など。「智萌」の例は未見。＊衆利：多くの利益という意味の前例は『墨子』四「兼愛下篇」の「姑嘗本原、若○○之所自生」など。＊喧然：前例は杜甫「成都府」詩（全二一八）の「○○名都會、吹簫間笙簧」など。＊論是非：前例は司馬遷「報任少卿書」（文四一）の「乃欲仰首伸眉、○列○○、不亦輕朝廷羞當世之士邪」など。

〈第七首〉

入深得奇趣　深きに入りて奇趣を得
昇險爲良隮　険しきに昇りて良隮を為す
搜勝有聞見　勝を搜すに聞見有り
逃俗無蹤蹊　俗を逃るるに蹤蹊無し
穴流恣迴轉　穴流　恣に回転し
竅景忘東西　竅景　東西を忘る

戇獣鮮猜懼　戇獣　猜懼すること鮮なく
羅人巧置罘　羅人　置罘に巧みなり
幽馳異處所　幽馳　処所を異にするも
忍慮多端倪　忍慮　端倪すること多し
虚獲我何飽　虚しく獲て　我　何ぞ飽かん
實歸彼非迷　実もて帰りて　彼　迷うに非ず
斯文浪云潔　斯文　浪りに潔と云う
此旨誰得齊　此の旨　誰か齊しきを得ん

（大意）

奥深い所へ入って、優れて珍しい趣を手にし、険しい所を登って、立派に登りきる。勝地を捜すのに、見聞した知識は有るが、俗を逃れるのに、踏み分けられた小道は無い。穴に注ぎ込む流れは恣に回転し、洞窟の中の景色はどちらが東西か解らなくなる。愚かな獣は疑い恐れることが少なく、猟師は巧みに網を掛ける。人目に付かぬように走って場所を変えても、残忍な考え（を持った猟師）は大抵推し量ってしまう。私は空しく名を得ても、どうして飽くことが有ろう。彼は実（獲物）を得て帰り、迷うことは無い。儒の道はみだりに潔さを言うが、その主旨は誰が等しく会得できるのか。

（注釈）

＊入深：第二首の「入山深更重」を縮めた言い方か。孟浩然「采樵作」（全一五九）の「採樵〇〇山、山深水重疊」など「入深山」の例は多いが、二字に詰めた例は珍しい。＊奇趣：前例は謝朓「敬亭山」詩（文二七）の「要欲追

○○、即此陵丹梯」など。＊昇險爲良隮：「昇險」「良隮」ともに用例未見。「隮」は『詩経』鄘風「蝃蝀」に「朝○于西」（毛伝：○、升）とある。なお「與王二十二員外涯遊枋口柳溪」詩（巻五）には「鑿山幽隱端、氣象皆昇隮」の例がある。＊搜勝：用例未見。類例の「探勝」は韓愈「送惠師」詩（全三三七）に「日攜青雲客、○○窮崖濱」と見え、「尋勝」も韓愈の「送靈師」詩（全三三七）に「○○不憚險、黔江屢洄沿」と見える。更に、「城南聯句」の「流滑隨仄步、搜尋得深行」の二句もここに類する。＊聞見：習見の語。「壽安西渡奉別鄭相公二首」其の二（巻八）にも「乃知減○○、始遂情逍遥」とある。＊逃俗：俗世間を逃れる意だろうが、前例未見。＊蹤蹊：「寒溪」其の二（巻五）にも「凝坐直視聽、戇行失○○」と見えるが、用例は未見。謝霊運「於南山往北山經湖中瞻眺」詩（文二二）の「石横水分流、林密蹊絶蹤」が参考となる例か。なお「蹤跡」であれば普通で、これは敢えて生硬な語に変え用いたものか。＊穴流：そのままではないが、木華「海賦」（文一二）に「江河既導、萬○俱○」の例がある。＊恣迴轉：「城南聯句」に「奇慮○○○」の例がある。＊竅景：用例未見。＊忘東西：「過分水嶺」詩（巻六）の「十步九擧轡、廻環失西東」はここに似た例。＊戇獸：用例未見。「戇」については第三首を参照。＊猜懼：『後漢書』七四上「袁紹伝」の「馥自懷○○、辭紹索去、往依張邈」など、史伝には習見の語だが、詩には余り見られない。＊羅人：用例未見。なお「羅者」は司馬相如「難蜀父老文」（文四四）の「○○猶視乎藪澤」などがある。＊罝罘：ともに兎あみを意味するが、熟語としての用例は未見。＊幽馳：これも用例未見。「幽步」「幽行」などは普通だが、獣について言うために「馳」を合わせたか。＊處所：習見の語。前例は宋玉「高唐賦」（文一九）の「雲無○○」や王維「木蘭柴」詩（全一二八）の「彩翠時分明、夕嵐無○○」など。＊忍慮：『詩経』大雅「桑柔」に「維此良人、弗求弗迪、維彼忍心、是顧是復」（鄭箋：國有善人、王不求索不進用之、有忍爲惡之心者、王反顧念而重復之）とある「忍心」を言い換えたものか。用例未見。＊端倪：謝霊運「遊赤石進帆海」詩

（文二二）の「溟漲無○○、虚舟有超越」は涯際の意だが、ここは伺い知る意であろう。前例には杜甫「水宿遣興奉呈群公」詩（全二三二）の「勲庸思樹立、語默可○○」があり、また韓愈「送高閑上人序」（全文五五五）にも「變動猶鬼神、不可○○」とある。＊虚獲：前例は曹操「與孫權書」（全三国文三）の「赤壁之役、値有疾病、孤燒船自退、横使周瑜○○此名」など。＊實歸：言葉の上では、『荘子』「徳充符」篇の「立不教、坐不議、虚而往、○而○」（疏：請益則虚心而往、得理則實腹而歸）を意識するか。＊斯文：『論語』「子罕」篇の「天之未喪○○也、匡人其如予何」を始めとして、用例は多い。孟は「讀張碧集」詩（巻九）にも「先生今復生、○○信難缺」と用いる。

〈第八首〉

屑珠瀉潺湲　屑珠　瀉ぐこと潺湲たり
裂玉何威瓌　裂玉　何ぞ威瓌たる
若調千瑟絃　千瑟の絃を調するが若く
未果一曲諧　未だ一曲の諧するを果たさず
古駭毛髪慄　古えの駭(おどろ)きに毛髪は慄え
險驚視聽乖　險の驚きに視聽は乖(はな)る
二老皆勁骨　二老は　皆　勁骨たり
風趨緣欹崖　風のごとく趨りて欹崖に緣る
地遠有餘美　地遠くして余美有り

我遊採棄懐　我遊びて棄懐を採る
乗時幸勤鑒　時に乗じて幸いに鑑(み)るに勤むるも
前恨多幽霾　前恨　多くは幽霾たり
弱力謝剛健　弱力　剛健に謝し
蹇策貴安排　蹇策　安排を貴ぶ
始知随事静　始めて知る　事に随いて静かなるを
何必當夕齋　何ぞ必ずしも夕に当たりて斎(ものいみ)せんや

（大意）

砕けた珠（のような飛沫）がサラサラと瀉がれ、裂けた玉（のような輝き）は何と厳かに美しいことか。水音は千の瑟を奏でているようで、これまで一度もハーモニーを成すことを果たしていない。古いことによる驚きは毛髪が震えるが、険しいことによる驚きは視覚と聴覚が乖離する思い。二人の老人はともに力強い骨相で、傾いた崖の上を風のように走る。この地は中央から遠く離れているので残された美が有り、私はここに遊んで嘗て棄てた思いを拾い取る。時機に乗じてたまたま鑑賞することに勤めたが、以前の恨みは多くは覆われ隠れたまま。弱々しい体力で、頑健な人に感謝をし、行き悩む杖で、うまく世話して貰うことを貴く思う。始めて解る、事に随って行動しても静寂な心は得られるのだと。何も夕方に斎戒する必要など無いのだ。

（注釈）

＊屑珠：「屑」は砕けた意だろうが、前例は未見。韓愈「詠雪贈張籍」詩（全三四三）の「定非燖鵠鷺、眞是屑瓊瑰」が類する例。なお「屑玉」は鮑照「白雲」詩（宋詩九）に「錬金宿明館、〇〇止瑶淵」とある。また「瀉珠」

は庾肩吾「答湘東王賚粳米啓」（全梁文六六）に「椓斛○○、嘉聞陶量」と、米を珠に見立てた例がある。＊裂玉：これも用例未見。＊威瓌：これも用例未見。なお「瓌」については第五首を参照。＊千瑟絃：「峽哀」其の六（巻一〇）に「石齒嚼百泉、石風號千琴」と、こちらは風の音に喩えた例がある。なお「調瑟」の例は徐悱妻「答外詩二首」其の一（玉六）の「○○本要懽、心愁不成越」など、「調絃」の例は鮑照「採桑詩」（玉四）の「君其且○○、桂酒妾行酌」などがある。＊一曲諧：「曲諧」「諧曲」ともに、用例未見。＊古駭：これも用例未見。なお「駭慄」の例は、『唐書』一七四「李宗閔伝」に「時訓注欲以權市天下、凡不附己者逐去、人人○○」と見える。＊毛髪慄：「嚴河南」詩（巻六）には「赤令風骨峭、語言清霜寒、不必用雄威、見者毛髪攢」との例が見える。感情の動きを毛髪によって表す言い方は他にも多い。＊險驚：生硬な言い方だが、険しいことによる驚きを意味するのだろう。もとより用例は未見。＊視聽乖：視覚と聴覚とがバラバラになることか。「乖視」「乖聴」を含めて、用例未見。なお「視聴」は第五首に既出。＊二老：『孟子』離婁篇上の「○○者天下之大老也、而歸之、是天下之父歸之也」は伯夷と太公望であり、孫綽「遊天台山賦」（文一一）の「追羲農之絶軌、躡○○之玄蹤」は老子と老莱子であるが、ここはそれら古代の聖賢のイメージを借りながら、この地に隠棲する高士を指したものか。なお、一本の「土老」は土地の老人の意だろうが、用例は未見。＊勁骨：白居易「遇物感興、因示子弟」詩（全四五九）に「吾觀形骸内、○○齒先亡」とあり、また張懐瓘の『書断』（韻府引）には、書体について「然張○○豐肌、徳冠諸賢之首」と言う例がある。＊風趨：前例は梁元帝「自江州還入石頭」詩（梁詩二五）の「迅鳥晨○○、輕輿流水散」など。＊縁欹崖：「縁崖」は、陶淵明「閑情賦」（集五）の「若憑舟之失棹、譬○○而無攀」や孫逖「山行遇雨」詩（全一一八）の「渉澗猜行潦、○○畏宿氛」などの例がある。「欹崖」は、用例未見。類例の「欹岸」は、杜甫「奉先劉少府新畫山水障歌」（全二一六）に「滄浪水深青溟闊、○○側島秋毫末」と見える。＊地遠：前例は王維「白鸚鵡賦」

（全文三二四）の「豈憐茲鳥、○○形微」など。＊餘美：用例未見。一本の「遺美」は班固「兩都賦序」（文一）に「先臣之舊式、國家之○○、不可闕也」とある。＊棄懐：これも用例未見。一本の「奇懐」は、陶淵明「和劉柴桑」詩（晋詩一六）に「良辰入○○、挈杖還西廬」と見える。＊乘時：習見の語。韓愈「永貞行」（全三三八）に「君不見太皇諒陰未出令、小人○○偸國柄」との例がある。＊勤鑒：鑑ることに勤めるということか。用例未見。＊前恨：これも用例未見。「秋懐」其の十一（巻四）に「前悔」の例、また「和令狐侍郎郭郎中題項羽廟」詩（巻九）に「舊恨」の例がある。＊幽霾：用例未見。「霾」は土ぐもる意で、前例は顔延之「和謝監霊運」詩（文二六）の「徒遭良時詖、王道奄昏○」など。孟は「弔元魯山」其の四（巻一〇）にも「賢人多自○、道理與俗乖」と使う。＊弱力：前例は『後漢書』四九「仲長統伝」の「○○少智之子」など。＊剛健：『易』乾卦の文言伝に「大哉乾乎、○○中正、純粋精也」とある。＊蹇策：前例未見。「蹇」は晩年の孟の情況を反映するのか、連作詩においてのみ見られ、中で「秋懐」其の十二に「蹇行散餘鬱、幽坐誰與曹」とあるのが比較的近い例。なお「策蹇」は、孟浩然「唐城館中早發寄楊使君」詩（全一六〇）に「訪人留後信、○○赴前程」という例がある。＊安排：『荘子』大宗師篇に「○○而去化、乃入於寥天」（郭注：排者、推移之謂、安於推移而與化俱去）とあり、謝霊運の「晩出西射堂」詩（文二二）に「○○徒空言、幽獨頼鳴琴」の例がある。＊随事：前例は成公綏「嘯賦」（文一八）の「故能因形創聲、○○造曲」など。＊當夕齋：「當齋」「夕齋」いずれも用例未見。「嚴河南」詩（巻六）には「苦竹聲嘯雪、夜齋聞千竿」の例がある。

〈第九首〉

昔浮南渡飆　昔　南渡の飆に浮かび

今攀朔山景　今　朔山の景に攀づ
物色多瘦削　物色　多くは瘦削たり
吟笑還孤永　吟笑　還た孤永たり
日月凍有稜　日月　凍りて稜有り
雪霜空無影　雪霜　空しく影無し
玉噴不生冰　玉は噴きて冰を生ぜず
瑶渦旋成井　瑶は渦まきて旋ち井を成す
潛角時聳光　潛角　時に光を聳やかし
隱鱗乍漂冏　隱鱗　乍ち冏を漂わす
再吟獲新勝　再吟　新勝を獲
返歩失前省　返歩　前省を失う
愜懐雖已多　愜懐　已に多しと雖も
惕慮未能整　惕慮　未だ能く整わず
頽陽落何處　頽陽　何処にか落つ
昇魄銜疎嶺　昇魄　疎嶺を銜む

（大意）

昔、南へ渡って行く疾風に乗って船を浮かべたが、今は、この北の山の景色を見ながら高く登っている。ここに見る物の姿は多くは痩せて削ぎ落とされ、詩を吟じ笑ってもやはり何時までも独り。日月は凍って角ができ、雪や

霜によってすべてが白く形が解らない。（しかし、その中）玉が噴き出るような泉には氷が張ることもなく、瑶が渦巻くような流れは忽ちのうちに井（のような深い渦）を成す。潜んでいる虯（みずち）の角は時折キラリと光り、隠れている魚は一瞬光を水面に浮かべる。再び吟じて新しい境地を得、歩を返して以前に省みた思いを忘れる。（こうしていると）心に適うことは多いけれども、恐れ惑う気持ちはまだ整理がつかない。傾いて行く太陽は何処に落ちて行くのか。昇ってきた月が疎らな山の嶺をくわえるように掛かっている。

（注釈）

＊南渡飆：「南渡」は習見の語だが、それに「飆」のついた形は未見。また「浮飆」も同様に未見。なお「昔～今～」という対比は珍しくなく、孟自身も多用している。＊朔山：「朔景」及び「攀山」「攀景」いずれも、用例未見。＊物色：習見の語。前例は顔延之「秋胡詩」（文二一）の「日暮行采歸、○○桑榆時」など。＊瘦削：前例は『南史』六二「賀琛伝」の「昔腰過於十圍、今之○○、裁二尺餘」など。＊吟笑：用例未見。＊孤永：これも用例未見。＊凍有稜：物が凍って尖るという発想は孟の好んだ感覚。凍る対象が異なるが、「寒溪」其の三（巻五）「波瀾凍爲刀、剸割鳧與鷖」はその類例。＊空無影：よく解らない。辺りが真っ白で、物の姿形が解らないようになるということか。＊玉噴：泉のように水の湧き出る所だろう。孟には「噴玉布」詩（巻九）もある。＊生冰：ここは格別問題の無い表現だが、「秋懐」其の十三（巻四）には「霜氣入病身、老人身○○」という孟らしい例がある。＊瑶渦旋成井：「瑶渦」「成井」ともに用例未見。第五首の「旋碧」が近いか。また「峽哀」其の一（巻一〇）の「峽水聲不平、碧沱牽清洄」も類例。＊潛角：前例未見。「角」は下の「鱗」との対から見て、角を持つ龍の属、虯を指すだろう。「潛虯」の例は、謝霊運「登池上樓」詩（文二二）の「○○媚幽姿、飛鴻響遠音」など。＊聳光：用例未見。なお「聳」は第五首を参照。＊隱鱗：前例は任昉「宣徳皇后令」（文三六）の「在昔晦明、○○戢翼」

など。＊漂冏：用例未見。「冏」は光、明るい意。＊新勝：新たな勝地の意だろうが、この意味での前例は未見。＊返歩：「伍子胥変文」に「留心半夏、不見鬱金、余乃〇〇當歸、芎窮至此」と見えるが、他には意外に用例が見当たらない。＊前省：用例未見。なお、第八首に「前恨」の例があった。＊愜懐：前例未見。類例の「愜心」は陸機「文賦」（文一七）に「故夫夸目者尚奢、〇〇者貴當」と見える。＊惕慮：前例は張説の「對詞摽文苑科策」（全文二二四）の「猶或〇〇推溝、労謙馭朽」など。＊頽陽：前例は謝瞻「王撫軍庾西陽集別時爲豫章太守庾被徵還東」詩（文二〇）の「〇〇照通津、夕陰曖平陸」など。＊昇魄：昇る月を言う前例は未見。「立徳新居」其の五（巻五）の「素魄銜夕岸、緑水生曉潯」はこの句に類する。＊疎嶺：用例未見。「銜嶺」は白居易「庾樓曉望」詩（全四三九）に「竹霧曉籠〇〇月、蘋風暖送過江春」とあり、また類例の「銜峯」は陳後主「關山月」詩（陳詩四）に「帶樹還添桂、〇〇乍似弦」と見える。また表現は異なるが、謝霊運「遊南亭」詩（文二二）の「密林含餘清、遠峯隱半規」は類似の情景を描くものだろう。

〈第十首〉

聖朝搜巖谷　聖朝に巖谷を搜す
此地多遺玩　此の地　遺玩多し
怠堕成遠遊　怠堕にして遠遊を成し
頑疎恣靈觀　頑疎にして霊観を恣にす
勁飆刷幽視　勁飆　幽視を刷い
怒水懾餘湍　怒水　余湍に懾えしむ

曾是結芳誠　曾て是れ芳誠を結ぶ
遠茲勉流倦　遠く茲に勉めて倦を流す
冰條聳危慮　冰條　危慮を聳やかし
霜華瑩遐盻　霜華　遐盻を瑩かす
物誘信多端　物誘　信に多端
荒尋諒難遍　荒尋　諒に遍くし難し
去矣朔之隅　去らんかな　朔の隅
翛然楚之甸　翛然たり　楚の甸

（大意）

聖天子の治める御代に巌に包まれた谷を（勝地を）捜して歩く。この地には前人の賞玩に漏れた景勝が多い。（官吏として）怠惰であるがゆえに遠遊を為し、頑なで粗野であるから心で恣に眺め渡す。激しい風が微かな視力しかない私の目を拭い払ってくれ、怒ったように逆巻く水は早瀬から弾け飛んでくる飛沫によって怯えさせる。嘗て私は芳しい誠の心をこの自然と結び合った。それから遠く時の経った今、勉めて倦んだ心を洗い流す。氷柱は危険に対する思いを際だたせ、霜の花は遠くまでの眺めを一層磨き上げる。物の誘いはまことに様々だが、荒野を尋ね歩くことは、まことに遍くし難い。この北の隅の地を去り、無心の境地で楚の地を訪れたい。

（注釈）

＊聖朝：前例は陳琳「爲袁紹檄豫州」（文四四）の「〇〇無一介之輔、股肱無折衝之勢」など。＊遺玩：前例未見。第八首の「餘美」及びその異文の「遺美」が思い合わされよう。＊怠堕：怠惰に同じ。前例は『史記』一一七「司

馬相如伝」の「常効貢職、不敢○○」など。＊遠遊：前例は『楚辞』遠遊篇の「悲時俗之迫阨兮、願輕擧而○○」など。＊頑疎：前例は嵇康「幽憤詩」（文二三）の「匪降自天、寔由○○」など。＊靈觀：前例未見。孟は「列仙文・安度明」（巻九）でも「○○空無中、鵬路無間邪」と用いるが、それは建物の意。＊勁飆：前例未見。「勁風」ならば、木華「海賦」（文一二）の「於是候○○」や、潘岳「秋興賦」（文一三）の「○○戾而吹帷」などがある。「寒溪」其の五（巻五）に「凍飆」の例が見えるが、いずれも「飆」を用いて意味を強めるのだろう。＊幽視：用例未見。類例の「幽觀」は顔真卿「謝陸處士杼山折青桂花見寄之什」詩（全一五二）の「會愜名山期、從君恣○○」など。また「刷視」は「弔元魯山」其の八（巻一〇）にも「二三貞苦士、○○聳危望」と見える。＊怒水：韓愈「送靈師」詩（全三三七）に「○○忽中裂、千尋墮幽泉」と見える。＊餘湍：「慴湍」とともに用例未見。「湍」は第五首を参照。＊芳誠：これも用例未見。＊流倦：倦み疲れた心を流し忘れる、ということか。用例は未見。「忘倦」は韓愈「奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻」詩（全三四四）に「紫極觀○○、青詞奏不譁」と見える。＊冰條：用例未見。「壽安西渡奉別鄭相公二首」其の二（巻八）に「悠悠孤飛景、聳聳銜霜條」という例がある。＊聳危慮：先にも挙げた「弔元魯山」其の八の「二三貞苦士、刷視聳危望」は、ここに類する表現。「危慮」は庾信「哀江南賦」（集二）の「逼切○○、端憂暮齒」などの例がある。＊霜華：前例は謝朓「奉和随王殿下」詩（十六首）其の十二（斉詩四）の「歳遠荒城思、○○宿草陳」など。白居易「長恨歌」（全四三五）にも「鴛鴦瓦冷○○重、翡翠衾寒誰與共」と見える。＊遐盻：用例未見。なお「盻」は霽韻に属し、他の韻字と合わない。あるいは刪韻の「盼」の誤りか。類例の「遐矚」は「送諫議十六叔至孝義渡後奉寄」詩（巻七）に「伊洛去未廻、○○空寂寥」と見え、また「遠盼」は宋之問「自湘源至潭州衡山縣」詩（全五一）に「浮湘沿迅湍、逗浦凝○○」とある。＊物誘：前例は嵇康「養生論」（文五三）の「心戰於内、○○於外」など。＊多端：前例は『楚辞』九辯の「何況

一國之事兮、亦〇〇而膠加」など。＊荒尋：孟には「立徳新居」其の五（巻五）にも「嵩嶇有懸歩、委曲饒〇〇」と見えるが、前例は未見。＊朔隅：用例未見。＊倏然：『荘子』大宗師篇の「〇〇而往、〇〇而來而已矣」（郭注：寄之至理、故往來而不難也。釈文：〇〇、自然無心、而自爾之謂）に基づく。詩の例は、杜甫の「七月一日題終明府水樓二首」其の一（全二三一）の「〇〇欲下陰山雪、不去非無漢署香」などがある。＊楚甸：前例は謝朓「和伏武昌登孫權故城」詩（文三〇）の「鵲起登呉山、鳳翔臨〇〇」など。

（三）「石淙十首」の位置づけ

最後に纏めとして、再度「石淙十首」の問題点を整理しておきたい。まず制作時期であるが、「石淙」が嵩山山中の景勝地を指すと考えて誤り無いものと思われるので、前稿で推定したように、元和元年（八〇六）冬に河南水陸転運判官、試協律郎に任じられて、洛陽に住むようになって間もない頃と判断する。孟郊が若年時に嵩山の少室に隠棲していた経験を持つ（『旧唐書』本伝。但しこの「隠棲」も、道観や寺院などに身を寄せて、そこに有る書籍を閲覧し、科挙受験のための勉強をするためのものであった可能性が高い。）ことは前稿にも指摘したが、連作の中にその時期を思いやる言葉が散見するのも、以上の訳注に見た通りである。母の意向に従い、科挙の受験のために長安へ出てきたとされる貞元七年（七九一）の秋以降に、旅の途中で嵩山に立ち寄る機会が一度も無かったとは言い切れないが、限られた資料の中から判断するなら、この元和元年の冬までに嵩山を訪れていた可能性は薄い。時間にして十五年余りを隔て、すでに五十代の後半に入って嘗てを振り返る思いが、「晩歩」「前蹤」「棄懐」「前恨」「前省」「曾是結芳誠」などの表現となって現れているのであろう。また第九首に見える「昔浮南渡飆、今攀朔山景」という表現も、貞元十五年に蘇州、越州の各地を遊歴した経験と、そこからは北方に当たる嵩山の景勝を歩く現在

の情況とが対比されていると考えて良いだろう。また、一般に山水を跋渉して景勝を求めることは、官僚社会における不遇感と結びついていることが多いが、孟郊のこの連作の場合も、長安で中央の職を得ることがかなわず、河南府の下級官として洛陽に来ざるを得なかったという思いが背景に有ったと考えられる。第十首の「聖朝捜巌谷、此地多遺玩。怠堕成遠遊、頑疎恣靈觀。」などは、その思いが表れた箇所と言える。長安から洛陽に来ることを「遠遊」と言うのは大げさなようだが、中央政府で然るべき職を得られなかった不遇感を表すのには、むしろ相応しい表現であろう。かつ「石淙」が則天武后以来の著名な景勝地であり、多くの宮廷詩人達が詩作の腕を競い合った場所であることを思い合わせれば、この地を独り歩き回って「遺玩」を捜していることは、もとより望ましい行動ではなかったはずだ。第三首の「實力苟未足、浮誇信悠哉。顧惟非時用、靜言還自咍。」の特に「顧惟非時用」の表現もその一例であるし、また第四首の「何況被犀士、制之空以權」の前後の表現も、よくは解らないものの、当塗者への批判を含めたものだろう。ただ一方で注目しておくべきことは、そのように不遇感を表し、かつ嘗ての「隠棲」の経験を思い起こしながらも、官僚社会への失望感をあからさまに口にしていないだけでなく、水車や猟師などの山中の「機心」に言及して、そこが必ずしも人智を去った理想の場所ではないことを示していることである。それは、あくまで士人として、官僚として生きようとする彼の基本的立場の表明であると言えよう。また、不遇感を懐きつつも、全体の詩の調子が落ち着いていることも、特に他の多くの連作詩と比べて注目される点である。これは、自然の中に身を置く遊適のテーマに因る面が大きいのだろうが、同時に不満足ながらも官職を得ていたことが背景に有ったことも否定できまい。この点、テーマが異なる故に単純な比較はできないとしても、同じく元和初年の作と推定される「立徳新居十首」と相い通じる精神状態であると思われる。

次に用語について見ると、訳注において指摘に努めたように、聯句、連作詩に共通する例が多い。常套的な言葉

を、形容語を代えることや賓語を類語に置き換えることで、意味内容を大きく変えることなく生硬な語にする手法が多用されており、それによって独自の語感を伝えている例も多数見られる。その際に注意しておきたいのは、「幽」「聳」「腥」「蹇」「戇」などの、孟郊愛用の語を形容語としてかぶせることで、新しい詩語を作り出している例が多いことである。そうすることによって、用語に新しさだけでなく、孟郊らしさも加えられているのである。このことはまた、連作詩という形式を孟郊独自のものとして練り上げる上で、極めて有効に作用していると思われる。常套語を一部組み替えて新しくする手法は、以前からあったものであるし、聯句でも積極的に用いた訳だが、愛用の語で色づけすることによって、それを自分の方法となし得たと言えるのではないか。また連作詩全体で見れば、こうした独自の詩語を作り、多用したことは、冷たく、鋭く、硬質なものを好む孟郊独特の感覚が、連作詩において最も尖鋭に表れていることとも関連するのではないかと思われる。

用いられる詩語の傾向を大づかみに見れば、彼の詩にはその初期から、用語の意図的な古めかしさ、大仰さが見られる。それが韓愈等に評価される孟郊の詩の特徴ともなっている。しかし晩年の詩、特に連作詩の持つ晦渋さ、奇矯さは、初期の作品には見られない。そして、意識的に晦渋にし、生硬な言葉や表現を用いる傾向は、晩年でも年を追うほど酷くなっていると感じられる。それとともに繰り返しを含む饒舌さ、くどさも、連作詩を中心とする晩年の作の傾向である。詩がやや散文化し、饒舌な印象が強まるのは、韓愈、白居易等を始めとして当時の詩人一般にも見られる傾向であり、大きく見れば、晦渋、奇矯な用語の多用と合わせて、孟郊がこうした時代全般の傾向の影響下にあった反映と言えるだろう。だが敢えて言うならば、その傾向が晩年に強まった背景には、聯句の制作によって、あるテーマの下にわき起こる感興を次々と繋いでゆく経験をしたことが、一因として指摘できるのではないか。用語を練り上げる点と共に、ここにも聯句の経験が生きているように思われる。また個人的に見れば、老

境に入り、感興を断ち切って一篇の詩に纏めあげることが容易に為し得なくなり、同じテーマで繰り返し詩を書かずにいられなくなるという、抒情のあり方の質的な変化が起こったという面も有ったのだろう。

最後に聯句との関係であるが、すでに述べたように、基本的に連作詩制作の背景に聯句での経験があったものと想像される。特にこの「石淙十首」の場合には、用語を中心として、聯句の経験をなぞっている点が少なくないと感じる。ところで、孟郊達はなぜ聯句を集中的に、しかも新しい方式を模索しつつ作ったのかということだが、それは従来の遊びとしてではないことは勿論だが、また閉ざされたグループ内部での文学的な実験を意図するだけのものでもなかったろう。月並みな言い方だが、結局は自分達の文学を広く主張し、存在をアピールするためでもあったはずだ。その点では、集中的に作られた多くの聯句作品は、あくまで人に見せるものとして作られていたと思う。それ故に、非正統な形式であることをむしろ最大限に利用して、互いの個性を戦わせ、人の耳目を集め得る〈奇作〉にまで高めたのであろう。それが官僚社会で評判を取るような、実質的な効果を上げることはついに無かったが、孟郊にとっては自分の存在意義を認識する良い機会となったのではないか。そして、聯句の制作の経験を受けて、正に文学による自己実現を求めた正統的な方法が、これらの連作詩であったと思う。従って、言うまでもないことではあろうが、連作詩は晦渋かつ奇矯な「峽哀十首」「秋懐十五首」を含めて、すべて読者を想定した作品であり、孟郊が自らの文学のあり方とその力量を主張する作品群であったと理解すべきだろう。

いずれにしても、この「石淙十首」は以後の連作の嚆矢であり、聯句の経験を生かしながら独自の方法を掴んで行く、その過程を示すものと思われる。だが聯句と連作詩との関係については、初期の作品だけでなく、連作詩の全体的な検討を踏まえた上で、改めて判断されるべきことであろう。従って、この点については今後更に他の連作詩（特に「立徳新居十首」「送淡公十二首」）に対する詳しい検討を重ねつつ、継続して考えて行きたい。